法華経如来神力品の神力について

――梵漢対照――

苅谷定彦

法華経の第二十章「如来の神力示現」(tathāgatarddhi-abhisaṁskāra)は、所謂法華経原始分の末尾に位置し、経全体を締めくくる重要な章であるが、現行梵本と漢訳とを対照すると、長行の冒頭に近い処で両者の間に少なからざる相違がある。しかもそれは内容上法華経全体の理解に関わるものを持つている点で注目されるべきである。

この章は、地涌の菩薩の仏滅後における法華経受持の発誓で始まるが、その部分は梵漢(竺法護訳「正法華」、羅什訳「妙法華」共)一致している。ところがその後、現行梵本(ベテロフスキー本、ギルギット本等も含めて)[1]に存する部分[2]は、両漢訳共、それとは相応しないし、欠ける所が多い。しかしその後は再び、この章の終りまで梵漢は一致している。要するに、一章全体のなかで、中間の一部分のみが梵漢一致しないわけである。ところで、法華経にあつては従来、羅什訳妙法華が何につけ規準となり、それに欠くるものは後代の増補附加とするのが大方の見方で、それでゆけば、当該の現行梵本の個処も後代の増補ということになるが、しかしここに関してはそのように見られるべきではない。

さて、現行梵本は次のように述べている。前述の地涌の菩薩の発誓に続いて、文殊師利を上首とする百千万億の菩薩、即ちこの娑婆世界に住する比丘等四衆、八部衆及び恒河沙の菩薩とが、「我々も又、如来の滅後この法門を説き、見えざる身でもつて空中に住して、その声を聞かせよう。」と云う。世尊は地涌の菩薩らに「善い哉、汝らはこの法門のためにそうすべきだ。汝らは如来によつてすでにそのように調熟せしめられているのだ。」と告げる。その時、釈迦仏と多宝仏とは微笑し、口より舌根を出すこと、梵天に達する程であり、その舌根より百千万億の光線を放つ。そしてそれら光線の一つ一つより百千万億の菩薩が出現する。彼らは金色の身に三十二相を備え蓮華の胎の獅子座に坐し十方の百千の世界に拡

がり、空中に住して教法を説く。釈迦、多宝の二仏が舌根でもつて、神力の変現（ṛddhi-pratihārya）をなした如く、他の世界からやつて来た宝樹下獅子座上の無量の仏たちも又、神力の変現をなす。釈迦仏と一切の仏とは、百千歳を満たして神力の示現（ṛddhi-abhisaṃskāra）をなした、と。

これに対応する漢訳は次の如くである。

「正法華[3]」於時溥首処於忍界諸菩薩無数億百千垓[4]及比丘比丘尼清信士清信女諸天竜神健沓悉阿須倫迦留羅真陀羅摩休勒及人非人。如来皆為神足変化。如来至真等正覚為現瑞応、悉得柔順法忍皆令書写正法華経。化異世界億百千数諸菩薩等、各各坐于諸宝樹下師子座上。爾時能仁世尊及此一切如来正覚、現其神足具足充満百千歳中有所興立。

「妙法華[5]」爾時世尊於文殊師利等無量百千万億旧住娑婆世界菩薩摩訶薩及諸比丘比丘尼優婆塞優婆夷天竜夜叉乾闥婆阿修羅迦楼羅緊那羅摩睺羅伽人非人等一切衆前、現大神力。出広長舌上至梵世一切毛孔放於無量無数色光皆悉遍照十方世界。衆宝樹下師子座上諸仏亦復如是、出広長舌放無量光。釈迦牟尼仏及宝樹下諸仏、現神力時満百千歳。

さて、現行梵本にある文殊を上首とする菩薩の弘経の誓いは両漢訳にないが、これまでの話の展開から見てこれを後代の附加増補と考えねばならぬ理由は全くない。これについて智顗が「法華文句」で「但見下方発誓、不見文殊等発誓何也[6]」という問を提起しているが、これは、智顗自らが「妙法華」のみの文脈からもここに文殊等の発誓があつてしかるべきであり乍らそれを欠いているという感を懐いたことを示すものに他ならない。それほどにこの文殊等の発誓はここにあつて当然で、逆にこれを欠くことは、法華経全体の流れの上に不自然な感を与えることになる。その文中の「見えざる身でもつて、空中に住して、（経の）声を聞かせよう」というのは、その弘経の時期が未来「仏滅後」であり、その時には文殊等は死してこの地上からは姿を消している故に「見えざる身でもつて」といい、その仏滅後という時期のこの地上の弘経者は、現在地下にあつて待機せる地涌の菩薩である故に、文殊等は自から「空中に住して」というのである。しかもこの死後空中に住すという観念は他の章にもあつて、それと相通ずる。即ち「授記品」のスブーティの授記の所で、その未来仏の寿命の量を述べた後、さらにその仏の滅後について、「彼は空中に住して常に教法を説示する[7]」とあり、又、常不軽菩薩品に、不軽菩薩が臨終に際して先仏の説いた法華経を空中から[8]の声によつて聞いたとある。この後、現行梵本で、釈迦仏がこの文殊等の発誓には答えず、地涌の菩薩にのみ答えて「汝らはそうすべきだ」と弘経の認可を与えているのは、法華経の意図する所が、仏滅後未来時のこの地上での弘経にあり、文殊等の現在地上にあるものは、その未来時には地上に

留まりえないからに他ならない。この地涌菩薩に対する弘経の認可（付属）も又、本来からの法華経の文であつて、後代の増補とは考えられない。

「妙法華」「正法華」はこれを欠いているため地涌菩薩に対する法華経の付属が全くなく、全体として一貫性を欠いたものとなつている。なぜなら、地涌菩薩出現の意図は、彼らに対して仏滅後の法華経受持を付属するにあつたからである。所で、漢訳にあつてはこの所に相当するものが全くないかのようであるが、「正法華」の「於時薄首……人非人等」の句を見るに、この句は次下の語句に接続せず、述部を欠いて全く文の態をなしていない。これを「妙法華」の「爾時世尊於文殊……人非人等一切衆前」と対照すると、正法華の誤訳と思われようが、現行梵本と対照すると文殊等が誓を述べる文章の冒頭と全く一致することは注目されるべきである。この点から再度「妙法華」を検討するに、文章としては全く問題はなくても、大神力を現ずる時、その直前に地涌の菩薩の発誓があるにも拘らず、なぜ彼らをさしおいて「文殊等の旧住の菩薩、……人非人等の前で」という限定をなしているのか、この点の理解が全く困難である。この所について智顗は「文句」で「旧住……菩薩」の語を「文殊等」と切り離し、これは「下方本化の地涌の菩薩」を指すとしている。[9] これは、「妙法華」においても非常に無理な解釈で、現行梵本からは明らかに誤つているのであるが、しかし、それほどまでしてここに地涌の菩薩を読み込もうとしたのは、智顗も又、上述の如き疑問を懐いたからに他ならないだろう。このように考えるならば「正法華」の文がむしろ原本に忠実な訳であつて、それは現行梵本の如く、あとに弘経の誓いが続いたのであり、但だ何らかの事情でその部分を欠いたのだと云える。

次に神力の示現を説くのであるが、ここは、序品以来説き来つたこの法門・法華経をついに地涌菩薩に付属した直後であり、とりわけ法師品以下この神力品に至る法華経後半は、この付属をめぐつて展開して来たのであつて、その意味から、法華経全体を締めくくる最後の重要な場面である。その神力示現が、「妙法華」では、釈迦仏が舌を出し、身の一切毛孔より無数の色光を放つて十方を照らし、宝樹下の分身諸仏もこれに倣つたとなつている。しかしこの場の神力示現が「妙法華」の示すたつたこれだけのものだとすると、それはあまりにも貧弱に過ぎる。これまで幾度となく壮大な場面を創作して来た法華経作者が、最後に来たつて俄かにその才能を枯渇させてしまつたとは考えられない。中国における諸注釈家も又この点同様の感を懐いたようである。即ち、法雲の「義記」は八種の神力、吉蔵「義疏」は五種、智顗「文句」は十種と、長広舌と放光の他に、謦欬、弾指、地動等を挙げ

て神力示現の中に入れている。しかし、所謂神力示現が長広舌と放光だけであることは、現行梵本においては勿論のこと、「妙法華」においても、この二つのみを述べて「現神力時満百千歳」とすることからも明らかであつて、謦欬等はこの神力を撤収した際の付随物にすぎないのである。それにも拘らず、それらをも神力に数えあげるのはそれによつて妙法華に説く長広舌と放光だけの神力の貧弱さを少しでも補なおうとする意図であろう。尚「妙法華」では光線は一切毛孔より出たことになつているが、このため吉蔵は「義疏」で「何故摂於舌相而不収光」という問を出している。[10] これも「妙法華」の問題点を指摘するものと云える。

仏が無量の光を放ち、その光線の一つ一つから何かあるものが出現するという内容の神力示現は、般若経や無量寿経その他大乗経典に数多くあるが、それらと比較するとき、注目されることは、法華経にあつては光線より出現したものが「菩薩」であることである。一体、法華経は、その前半で「一切衆生が一仏乗の菩薩なること」を明かし、法師品以下の後半は、その菩薩行の第一として「仏滅後の法華経受持」ということを説くもので、それは、「仏滅後における菩薩による菩薩に対する教化」と要約しうる。法華経が自から経の旗印として高く掲げる「教菩薩法」(bodhisattva-avavāda) もまさにこの意味である。それ故、光線の中から無数の菩薩が出現し、十方に拡がつて教法を説くという光景は、そのスケールの壮大さによる単なる神力の誇示ではなく、その内容においてまさに法華経の根本理念を見事に表現したものであつて、説き来たつた法華経を終るに際しての神力示現として実にふさわしい。このような現行梵本の神力示現が、後代の増補によるものであるとは全く考えられない。むしろ逆に、「妙法華」の方に後代の何か意図的な改変があると思われる。

インドの法華経注釈、世親造「法華論」を目るに、この章に関しては「修行力者五門示現、一者説力……説力者有三法門神力品示現。一者出広長舌令憶念故。二者謂謦欬声説偈令聞故、令聞声已如実修行不放逸故。三者弾指覚悟衆生令修行者得覚悟故」[11] とあるのみで、長広舌と謦欬と弾指とを挙げて放光はなく、他処においても神力品の放光について言及する所は全くない。しかし、これは法華論がここで神力を列挙しているのではなく、仏の「説力」即ち「仏説法の力用」を述べるものとしてこの章を把え、その立場から説法に関係するものだけを挙げたのであつて、放光に関してその原本が現行梵本と相違していたとは勿論考えられない。

次に「正法華」を見るに、「為神足変化」「現瑞応」とはあるがその神足がどのようなものであるかについては全く言う所がない。その代りか「得柔順法忍」「令書写正法華経」と

現行梵本や「妙法華」にない語句がある。しかしこのことから直ちに、その原本が現行梵本とは全く異種のものであつたとは云えない。なぜなら、次下の「爾時能仁世尊……」以下章の終りまでは現行梵本と殆んど一致しており、その間、相違が処々にあつてもそれは訳者の解釈に依るものであるからである。しかも偈において、「其舌神根、暢音梵天、演奮光明、億百千姟」[12]とあつて、これは現行梵本と一致し、訳者竺法護も神力の内容についてはある程存知していたことになる。そこでさらに、この文を検討するに、文中の「化」は、「教化」の意ともとれるが、前後関係から「化作、化現」の意とすべきで、「化ニ（一作）異世界億百千数諸菩薩等各各坐ニ于諸宝樹下師子座上ニ」と読んで、梵本の "bahūṇi bodhisattva-koṭī-nayuta-śata-sahasrāṇi niścerur……padmagharbe siṁhāsane niṣaṇṇāḥ"[13] に相応させうる。もつとも「異世界」と「宝樹下」[14]の語が問題である。一方では、"te (=tathāgatā) 'nya-lokadhātu-koṭī-nayuta-śata-sahasrebhyo' bhyāgatā ratnavṛkṣa-mūleṣu pṛthak-pṛthak siṁhāsanopaviṣṭā" に相応するものと見ることも可能であり、この場合「異世界」等は語句も語順も先の場合よりよく一致するが、しかし、それではどうしてここに「菩薩」の語が出て来るのか全く説明出来ない。そこでこの文を二つに分けて、「化ニ異世界……諸菩薩等ニ」は、先の場合の梵文の前半に、「各各坐ニ……師子座上ニ」は、後の場合の梵文の後半に相応するものとすれば、両者の場合における難点はある程度補いうる。ともかく、ここに「菩薩」の語があることに注目する時、「正法華」の原本も神力の内容として菩薩の出現を述べるものであつたことは確実である。それにも拘らず、「正法華」がどうしてこのように断片的な語を列べて、現行梵本と全く異種の様相を示しているのか。それは恐らく法護所依の梵文写本が、この個処で破損もしくは汚損があり、判読出来る語だけをそのまま訳出した結果であると想像するより他はあるまい。以上から、現行梵本の当該の個処は法華経原始分本来からの文と見なされるべきである。

1　P・G両本共真田有美先生より写真版を拝借した。
2　KN本 p. 386. 8～p. 388. 4.　3　大正九、一二四頁上。4　大正新脩大蔵経は「受」とするも宮本の「及」をとる。5　大正九、五一頁下。6　大正三四、一四一頁下。7　KN本 p. 149. 1～2. 8　KN本 p. 379. 8～9. 9　大正三四、一四一頁下。10　大正三四、六一八中。11　大正二六、一〇頁上～中。12　大正九、一二四頁下、梵本第二偈前半。13　KN本 p. 387. 11～12. 14　この語に関する土田本注2（p. 328）は疑問。15　KN本 p. 388, 3～4.